熊本大学教育学部紀要、第六七号、二六八―二七四、二〇一八

小学校国語の副教材としての斎藤隆介「半日村」について（上）

――故事成語「愚公移山」との比較――

中尾　健一郎

はじめに

斎藤隆介と滝平二郎の両者によって世に出された絵本には、「花さき山」「ベロ出しチョンマ」など、知名度の高いものがあり、中でも代表作である「モチモチの木」は現行の小学校三年生の国語教科書に採用されている[1]。その他の斎藤・滝平の絵本のうち、過去には本稿で取り上げる「半日村」をはじめとする七編が教科書に採録されたことがあり[2]、「半日村」については現在、「モチモチの木」に関連する小学校国語の副教材として使用されている。

ところで「半日村」は、その内容から『列子』湯問篇に見える「愚公移山」（愚公 山を移す）の類話であると考えられる。これは特別に発見というほどのものではない。この両者を併せ見れば、村の南側にある山を崩そうとする子供・一平と、やはり山を崩そうとする老人・愚公の役割がほぼ一致することは、誰もがすぐに気づくことである。ただ単なる類話なのか、それとも斎藤が「愚公移山」の話を翻案したのか、また後者の場合、いかなる創作の動機があったかは全く不明である。そこで、まず「半日村」と「愚公移山」の内容について比較検討を行い、両者の間でどのような違いが見られるかを論じ、続いて斎藤における「半日村」創作の背景とその動機について考察する。ただし紙幅の都合により、本稿では「半日村」と「愚公移山」の比較検討のみを行い、「半日村」成立の背景等については次稿に委ねるものとする。

一　小学校国語における副教材「半日村」

斎藤隆介（一九一七～一九八五）の作品のうち、小学校の国語教科書に採用されたことのある作品の多くは、『ベロ出しチョンマ』（理論社、一九六七年）に収められている。同書は、「日教組教育新聞」に連載されていたものの半分を収録したもので、その中から教科書に採用されたものを見ると、「モチモチの木」「八郎」「ソメコとオニ」「花さき山」「天の笛」「ベロ出しチョンマ」「緑の馬」の計七編が挙げられる[3]。

「半日村」のみは『立ってみなさい』（新日本出版社、一九六九年）の「新しい話」の部に収められており、この点が他の教科書に収録されている童話と異なる。しかも「花さき山」と「モチモチの木」が、『ベロ出しチョンマ』の出版後、間もなく絵本として出版されているのと対照的に、『立ってみなさい』の出版から絵本「半日村」の刊行までには相当の歳月を費やしており、斎藤はその「あとがき」に次のように述べている。

「いやァー九年かかったなァ」
出来て来た絵を見てしみじみ思った。
九年間の途中、滝平さんとは組んで挿絵をお願いしたが、絵本を出すのは久しぶりだ。
御苦労様。みなさんも滝平さんの絵の表情をたのしんで下さい。特に子供の群像の一人一人の表情のたのしさを。
この物語は早くから教科書にのり、みなさんに親しまれていますが、ここでもう一ぺん考えてみて下さい。半日村がなぜ一日村になったのか――。
一平がはじめに一人で考えたことが大切だったのですね。村じゅうが動きはじめてしまいました。
そういうこともあります。ありますね。
一九八〇年八月

斎藤がいうところの「九年かかった」とは、絵本の出版を計画した昭和四六年（一九七一）から数えて九年後ということであろう。また、「この物語は早くから教科書にのり」と述べている教科書は、昭和五二年（一九七七）から同五四年の三年間、学校図書より刊行された『国語 二年下』を指す[4]。結局、「半日村」が絵本として世に出たのは、『立ってみなさい』が出版されてから、実に十一年後のことであった。

現在は「モチモチの木」とその附録となる「ソメコとオニ」を除き、「半日村」をはじめとする斎藤の作品は国語の教科書には採用されていないが、青木伸生編『10分で読める物語二年生』（学研マーケティング、二〇一七年第一〇刷、二〇一〇年初版）に収録されており、また長崎源之助監修『読んでおきたい　2年生の読みもの』（学校図書、二〇一三年第三二刷、一九九七年初版）にも滝平二郎の挿絵と併せて採用されている。小学生低学年向けの国語の副教材として、その価値は減じていないといってよい。

「半日村」を副教材として使用するとすれば、その長所はどこにあるだろうか。現行の「小学校学習指導要領」（二〇一七年告示）における「各学年の目標及び内容」では、第1学年・第2学年向けの「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「内容」に、「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」が記されており、現代の小学生には縁が遠くなった、稲などの農作物のこと、土を運ぶのに用いる「もっこ」のことなど、農耕に関連する昔話的な内容を備えることもさることながら、主人公が村人の利益――どうしたら皆が幸せになれるか――について考え、単独で起こした行動がやがて村全体を巻き込み、不可能と思われた山を低くするという目的が達成されたという最終場面が、困難な問題を継続的な努力と協働によって克服・解決するという道徳的教訓を示すところにあるだろう。

二　『列子』湯問篇の「愚公移山」

小学校国語の副教材として活用できる「半日村」は、一見したところ昔話風である。斎藤自身も昔話を再話（斎藤の認識としては「再創造」[5]）したものとして「天狗笑い」（『ベロ出しチョンマ』所収）や「雪女」（『立ってみなさい』所収）などを創作しており、昔話を重視する見解を『立ってみなさい』の「あとがき」に次のように述べる。

> 昔ばなしを再話する、ということには、たいへん大切な意味があると思います。
>
> 考古学者が土の中から掘り出して研究している土器やその他の品々は、私たちの祖先の生活を教えてくれますが、いま私たちが使っている言葉や語り伝えられている昔ばなしには、私たちの先祖の日本人の生活と心が生きています。
>
> それを知り、受けとり、子孫に伝えていくのは私たちの大切な仕事でしょう。
>
> （二五二頁）

斎藤は昔話を先祖から伝わる「日本人の生活と心」を伝えていくことを、「大切な仕事」と考えている。しかしその一方、斎藤自身は同じ文章の中で、再話で表現できないものを民話形式で新しく書いたとする。

> さてしかし、再話を続けているうちに、どうしてももどかしいものが心に動いて来るのを感じました。
>
> そこで、民話という民族的な形を借りて自分の心にいま一番問題になっていることを書いてみたのが後半の「新しい話」の数編です。
>
> （二五三～二五四頁）

『立ってみなさい』は、「昔ばなし」と「新しい話」の二つの創作群によって構成されている。そして意外なことに、作者は「半日村」を「昔ばなし」ではなく、「新しい話」の部に入れている。この事実が意味するのは、斎藤自身は「半日村」を民話の形で書いているが、「昔話を再話」したつもりはなかったということである。詳細は次稿に譲るが、斎藤は「半日村」を彼のいうところの「創作民話」[6]として著したのである。

日本の昔話の再話でなかったとすれば、「半日村」は斎藤のオリジナルの創作民話なのか、このような問いが生じたところに、中国の故事成語「愚公移山」が浮かび上がってくる。

「愚公移山」とは、『列子』湯問篇に見える、大きな山の北麓に住む老人・愚公が、山を移そうとする話である。故事成語としては、たゆまない努力によって、最終的には成功を収めることの喩えとして用いられる。現行の高等学校国語「古典B」に採用されることがあり、日本において全く未知の文献ということではない。

「半日村」とよく似た部分があり、故事成語でもあるため、斎藤はこの話を知っていたと考えられるが、「半日村」と「愚公移山」では異なる箇所もある。

そこでまず参考までに、「愚公移山」の内容にふれたい。以下、四段に分けて原文[7]と書き下し文を挙げよう。

太行王屋二山、方七百里、高万仞。本在冀州之南、河陽之北。北山愚公者、年且九十、面山而居。懲山北之塞、出入之迂也、聚室而謀曰、吾与汝畢力平険、指通予南、達于漢陰。可乎。雑然相許。

太行・王屋の二山、方七百里にして、高さ万仞なり。本冀州の南、河陽の北に在り。北山の愚公なる者、年且に九十にならんとし、山に面して居る。山北の塞がり、出入の迂なるに懲しみ、室を聚めて謀りて曰はく、吾、汝らと力を畢くして険しきを平らかにし、予南に指通して、漢陰に達せん。可ならんか、と。雑然りとして相許す。

まずこの故事成語の舞台となる場所と主人公の置かれた状況について確認しよう。太行山は、河北省・山西省東部・河南省を南北に走る山脈。王屋山は、山西省西部にある山。これらの山は『列子』においては、もともと冀州（現在の河北省から山西省にかけての地域）の南側、黄河の北側に在ったことになっている。山の北側に住んでいた愚公が、山に遮られて南側の土地へ行くのに遠回りせざるを得ないことを苦にして、家族を集めて相談し、河南省の南部を通り、漢水の南側へ抜けられるように山を削って平らにすることに決めた。

其妻献疑曰、以君之力、曾不能損魁父之丘。如太行王屋何。且焉置土石。雑曰、投諸渤海之尾、隠土之北。遂率子孫、荷担者三夫、叩石墾壌、箕畚運於渤海之尾。隣人京城氏之孀妻、有遺男、始齔、跳往助之。寒暑易節、始一反焉。

其の妻、疑ひを献じて曰はく、君の力を以てしては、曾ち魁父の丘をも損なふ能はず。太行・王屋を如何せん。且つ焉くにか土石を置かん、と。雑曰はく、諸を渤海の尾、隠土の北に投ぜん、と。遂に子孫を率ゐ、荷担する者三夫、石を叩き壌を墾き、箕畚もて渤海の尾に運ぶ。隣人京城氏の孀妻に、遺男有り、始めて齔し、跳り往きて之を助く。寒暑、節を易へて、始めて一たび反る。

太行・王屋の二山を削ることを決めた愚公一家であるが、ここで愚公の妻が異議を唱える。それは、老人の力では魁父の丘（小さな丘）を崩すこともできず、しかも削った土や石の始末をどうするのかという、極めて常識的なものであった。対して愚公らは、土や石は渤海（現在の遼東半島と山東半島に囲まれた内海）の沿岸、隠土（中国東北部にあった州の名）の北側に捨てればよい、と答え、愚公は子や孫と一緒に石を砕き土を掘り、これらをモッコ（箕畚）に入れて運び始めた。隣家の寡婦に、歯が抜け替わったばかりの男児がいたが、彼も一緒に加勢し、家に帰るのは夏と冬の年に二回だけであった。

河曲智叟、笑而止之曰、甚矣、汝之不恵。以残年余力、曾不能毀山之一毛。其如土石何。北山愚公長息曰、汝心之固、固不可徹。曾不若孀妻弱子。雖我之死、有子存焉。子又生孫、孫又生子。子又有子、子又有孫。子子孫孫、無窮匱也。而山不加増。何若而不平。河曲智叟、亡以応。

河曲の智叟、笑ひて之を止めて曰はく、甚だしきかな、汝の不恵なる。残年の余力を以てしては、曾ち山の一毛をも毀つ能はず。其れ土石を如何せん、と。北山の愚公、長息して曰はく、汝が心の固なるは、固より徹すべからず。曾ち孀妻の弱子にも若かず。我の死すと雖も、子有りて存す。子又孫を生み、孫も又子を生む。子又子有り、子又孫有り。子子孫孫、窮匱する無し。而るに山は加増せず。何若ぞ平らかならざらん、と。河曲の智叟、以て応ふる亡し。

太行・王屋の二つの山を崩そうと働いている愚公を、黄河の傍に住んでいる智恵者・智叟が笑って止めた。老年の非力な愚公では、山を移すことはできないと言うのである。それを聞いた愚公は歎息して、通念にとらわれた頑なな智叟を隣家の子どもにも及ばない者と説く。なぜならば、たとえ愚公の寿命が尽きたとしても、子や孫らが代々愚公の志を受け継いで、山を削って平地にしようとするからである。智叟はこのように返答されて言葉を失ってしまう。

操蛇之神聞之、懼其不已也、告之於帝。帝感其誠、命夸蛾氏二子負二山、一厝朔東、一厝雍南。自此冀之南、漢之陰、無隴断焉。

操蛇の神、之を聞き、其の已まざるを懼るるや、之を帝に告ぐ。帝、

其の誠に感じ、夸蛾氏の二子に命じて二山を負はしめ、一は朔東に厝き、一は雍南に厝く。此れより冀の南、漢の陰、隴断無し。

愚公と智叟のやり取りを知った山の神は、愚公が山を崩すことを止めないことに恐れをいだいて天帝に報告した。天帝は愚公の真心に感心し、夸蛾氏の二人の子に二つの山を背負わせて、太行山を朔州（現在の河北省）の東部に、王屋山を雍州（現在の陝西省）の南部に置かせた。それ以来、冀州の南側から漢水の南側にかけての一帯には、切りたった丘はなくなったという。

以上が『列子』の「愚公移山」の内容である。斎藤の「半日村」と関わる事項では、山を移すことのほかに、愚公の隣家の未亡人の子供のことが挙げられる。歯が生え替わったばかりの子供であるが、家には年に二回帰るだけという、はなはだ真面目で勤勉な人物である。筆者は、彼こそが一平の直接的なモデルであると考える。というのは、「半日村」の初出である『二年の学習』（臨時増刊号、学習研究社、一九六九年九月）の挿絵において、主人公・一平は読者である小学二年生、つまり、歯の生え替わる七～八歳頃の子供と同年代の人物として造形されているからである。挿絵を描いている滝平二郎は絵を創作する際、斎藤の意を充分に汲んでいると見られるから、挿絵には斎藤のイメージが投影されていると言える[8]。

ところで、「愚公移山」に登場する少年が、かりに「半日村」の一平のモデルであったとしても、作品自体には他にも様々な相違点がある。このことについても検証する必要があるだろう。

三　「半日村」と「愚公移山」の比較

「愚公移山」と「半日村」では主人公が異なるのは前に見たとおりであるが、この二つの間には、さらに様々な相違点がある。絵本「半日村」の段落ごとにその梗概を記し、「愚公移山」についても要点を連ねて、本稿末尾に比較のための対照表を掲げることにする。この対照表から「半日村」と「愚公移山」の相違を示すと次のようになる。

（ア）主人公について　「半日村」では少年、「愚公移山」では老人。

（イ）山について　「半日村」では南側にある無名の、日を遮る一つの山。「愚公移山」では太行・王屋という巨大な二つの山。

（ウ）山の土を移す場所　「半日村」では村の北側にある湖。「愚公移山」では中国大陸の東側にある渤海沿岸。

（エ）山の土を移す人々　「半日村」では、最初は少年一人であったが、後に子供たち、大人たち、村中の人々、代替わりした大人たちと子供たちが加わる。「愚公移山」では老人とその子と孫に加えて、隣家の寡婦の子供。

（オ）主人公の行動に意見する、あるいは主人公を嘲弄する人物　「半日村」では、はじめは主人公の友人である子供たち、次に村の大人たち。「愚公移山」では老人の妻、それから智叟。

（カ）山が移るのにかかった時間　「半日村」では、主人公の少年が大人になり、子供が生まれて生長するほどの長期間。「愚公移山」では、九十歳になろうとする愚公一代のみの短期間。

（キ）山を移した存在　「半日村」では主人公を含む村人たち。「愚公移山」では、天帝の命令を受けた二人の巨人。

（ク）山が移った場所　「半日村」では村の北側にある湖の中。「愚公移山」では、山西省の東側と西側。

「半日村」と「愚公移山」を比較して、その顕著な違いを挙げるなら、それは後者の話の規模が大き過ぎることである。中国大陸の地図を開いてみればすぐにわかることだが、愚公が移そうとする太行山も王屋山も、少人数で土を移すには巨大な上に、渤海までの道のりも黄河の中流域からは驚くほど遠い。したがって、主人公とその関係者が力を合わせて山を移すという主題は共通するが、両者には空間的にも時間的にも大きな隔たりがある。

「山を移す」という主題が共通するにもかかわらず、「半日村」と「愚公移山」には、何故にこのような差が見られるのだろうか。また斎藤の作品には、山を移す大男、「八郎」「三コ」（いずれも『ベロ出しチョンマ』に収録する作品の主題であり、かつその主人公の名前）が登場するが、「半日村」においては「愚公移山」とは異なり、「山を動かす巨人」は登場せず、あくまでも人間の労働力で山を移すことが記述される。それは何故なのだろうか。

筆者が考えるに、それは斎藤が「半日村」を執筆するにあたって、『列子』の「愚公移山」説話を直接的に利用したのではなく、他にも基づいた文献があり、しかもその文献と斎藤の思想が深く関わっているからである。斎藤の思想および彼が「半日村」執筆の際に基づいたと見られる文献については、続稿において論じることにしたい。

注

1 斎藤隆介の作品については、絵本および童話は鍵括弧でくくり、童話集の書名については二重鍵括弧でくくるものとする。

2 棚田真由美「斎藤隆介作・滝平二郎絵の教材作品に関する考察」（『兵庫教育大学近代文学雑志』、兵庫教育大学学校教育研究科紀要、二〇〇七年）一八～二〇頁を参照。なお後掲注（3）の教科書における斎藤作品の採録数は同氏の研究による。

3 採録数は、「モチモチの木」一七例、「八郎」六例、「半日村」四例、「ソメコとオニ」四例、「花さき山」三例、「天の笛」二例、「ベロ出しチョンマ」二例、「緑の馬」一例。

4 注（2）所掲、棚田論文、資料一〇「斎藤隆介作・滝平二郎絵の教材作品採録状況」を参照。同論文によれば、「半日村」の採用例は、学校図書が昭和五二～六〇年に刊行の『国語　二年下』および平成元～三年に刊行の『国語　二年上』の四例にのぼる。

5 『立ってみなさい』「あとがき」に、斎藤は木下順二の言葉と断った上で、「「再話」は「再創造」でなくてはならないでしょう」（二五三頁）と述べている。なお、木下の言葉とは、木下順二「民話とその再創造」（『木下順二集』第三巻、岩波書店、一九八八年）中の文章、「問題の第二は、さてそうやって自分なりに取って押えた民話なるものを、どうやって再話なり再創造なりするかということである」（三八四頁）を指すと考えられる。

6 「創作民話」という言葉とこれについての斎藤の考えは、古田足日との対談「「創作民話」をめぐって――民話と「創作民話」の文学的課題」（『斎藤隆介全集』第二巻〈岩崎書店、一九八二年〉所収。初出は「季刊文学教育」第一号、鳩の森書房、一九七〇年六月）に述べられている。

7 『列子』の原文は、楊伯峻『列子集釈』（新編諸子集成、中華書局、一九七九年。初出は龍門聯合書局、一九五八年）により、正字体を通行の字体に改めた。また山の名である「太行」は、原文では「太形」であるが、晋・張湛の注に従って文字を改めた。また「何苦而不平」句における「苦」字も、楊伯峻の注にしたがい「若」字に改めた。

8 滝平二郎は創作民話集『わらの馬』（講談社、一九七九年）の「あとがき」に、「すでに私は、さし絵や絵本などで斎藤作品の絵を五百枚以上も描いていましたし、斎藤さんの呼吸に合わせることについては人一倍変な自信がありました」（八〇頁）と述べており、彼の斎藤作品の挿絵を描くことに対する自信のほどが窺える。なお、『わらの馬』に収められている斎藤の作品は、一九七〇年代後半に滝平からのはたらきかけによって執筆されたものであり、滝平の文章の執筆時期は「半日村」の初出からは隔たっているが、一九六九年に発表された「半日村」と一九八〇年に出版された絵本「半日村」の挿絵における一平の人物描写を比較すると、髪型の表現などを除けばさほど大きな変化は見られない。このことからも、斎藤・滝平の両者の間には、一平の人物造形について共通理解があったと見てよい。

○「半日村」「愚公移山」対照表

半日村	愚公移山
①半日村の由緒。村のうしろにある高い山に遮られて、午前中は日が当たらない。 ②昼頃にようやく日が山の上に姿を見せ、鳥はうたい、花は笑い、子供たちは騒ぎ出す。田圃の稲も元気に水を吸い上げ始める。 ③すぐに夕方がきて、村の前にある湖から寒い風が吹いてくる。稲は水を吸い上げるのもやめて、体を縮こめて震え出す。半日村の米はよその村の半分しかとれず、村人はみな痩せて、元気がない。 ④一平という子供がいた。両親が、日を遮る山がある、悪い村に生まれたと思って諦めるより仕方が無い、と話し合っているのを耳にする。 ⑤一平は翌朝、袋を担いで山に登った。 ⑥山の頂上につくと、土を袋に詰めて山を下り、土を村の前の湖に落とした。再度、山の頂上に登り、土を袋に詰めると、また山を下って土を湖に落とした。その頃、昼になって、子供たちが騒ぎ出した。 ⑦一平が山の土を湖の中に移しているのを見た子供たちは、興味をもって、一平にその目的を聞いた。すると一平は、「あの山をみずうみに　うめちまおうとおもってるんだ」と答える。それを聞いた子供たちは、「一平のやろう、ばっかじゃなかろうか、気がちがったんじゃなかろうか」と、大笑いしたが、一平は山の土を湖に移すことをやめなかった。 ⑧毎日々々、一平が休まず続けているので、まねする子供が三、四人でてきた。 ⑨そのうち、村じゅうの子供たちが一列になって、袋を担いで山に登り始めた。大人たちは「山が　うごかせるもんじゃねえ。みずうみをうめられるもんじゃねえ」と初めは笑っていた。 ⑩しかしその後、もっこの使い方、土の掘りかたを教える大人もでてきた。 ⑪山は低くなる気配すらなかったが、次第に土を運ぶ大人が増え、仕事の合間に、村じゅうの大人たちが、もっこを担いで山にのぼり始めた。 ⑫何日も何日も、大人と子供が土を担いで山を登ったり降りたりしているうちに、日のあたるのが早くなったような気がした。	①黄河の北側に太行山・王屋山という万仞の高さをもつ山があった。 ②山の北側に、愚公という九十歳に近い老人がいた。山に面した土地に住み、道が険しく、山の南側に行くのに遠回りをしなければならないのを苦にしていた。 ③愚公は家族を集めて、一家で力を合わせて険しい山を平らにして、河南省をまっすぐに通り、漢水の南に到達できるようにしようと相談した。 ④家族はみな賛同したが、愚公の妻は夫の腕力に疑いを挟んで、その上、運んだ土や石をどこへ置くのかと尋ねた。 ⑤愚公らは土と石は東にある渤海と東北の果ての地に放り投げればよいと答えて、とうとう愚公は子と孫を連れて三人で、石を砕き、土を掘って、もっこに入れ、渤海の端へ運んだ。 ⑥愚公の隣に住む寡婦の、歯が抜け替わったばかりの七、八歳の子供も愚公を手伝い、そうしているうちに、やがて一年が過ぎた。 ⑦黄河のほとりに住む智叟が、愚公を思慮分別がないと笑って、老人の非力と、目的を達成する見とおしが薄いことを嘲った。 ⑧愚公は、智叟の見識の狭さに嘆息し、寡婦の子供にも及ばないとした。また、たとえ自分が死んでも、子や孫が代々自分の行いを受け継いだなら、山の高さは増えないのだから、いつかきっと山は平らになると諭した。それを聞いて、智叟は沈黙した。 ⑨蛇を手に持つ山の神は、愚公と智叟のやりとりを聞いて、愚公の行いがやまないことを恐れた。そこでこのことを天帝に告げると、天帝は愚公の誠意に感じ入った。そして夸蛾氏の子である二人の巨人に二つの山を背負わせ、太行山を山西省の東側に、王屋山を山西省の西側に置かせた。 ⑩この時から、黄河の北側から黄河をとおって、漢水の南側に至るまで、切り立って聳え、人を遮る場所はなくなった。

⑬何年も何年もたって、大人たちは死に、一平たちは大人になった。
それでも村人たちは仕事の合間に土を運び、一平の子供たちも遊ぶ代わりに山に登って土を運んだ。
⑭ある朝、半日村で鶏がなくと、村の田圃に朝日が射した。一平をはじめ、村人たちは大人も子供も家の前に飛び出して、精一杯、朝日を浴びて、声を出して笑った。
⑮山は半分になり、埋め立てられた湖も半分になって、そこは田圃になった。それから半日村は、「一日村」と呼ばれるようになった。